

# 沈黙に向き合う

沖縄戦聞き取り47年

(48)

石原昌家

第三次家永教科書裁判の第一審東京高裁で、私が証人尋問を受けるにあたり、国側の反対尋問では研究仲間の大城将保さんの著書が第一審判決文に引用されている。その内容で私を攻めてくるだろうと予測し、その対策を立てていた。しかし、それには全く触れなかったのが拍子抜けしたことを本連載47回(8/31)で述べてきた。

それとは、国側にとつてはその点について、私の反対尋問をする上、私への反対尋問をする上、きた。

## 決定的証言

琉球新報では1988年6月22日夕刊社会面トップで、「渡嘉敷島の集団自決」の「軍からの命令あった」と「慰霊の日」前に新証言

## 一審後の新聞報道

を本人の写真付きで報じている。「富山さんによると、渡嘉敷への米軍攻撃が始まる数日前、軍は急きよ役場を通じて非戦闘員である島の青年たちを役場前に集めていたのだ。これは覆耳に水の出来事だった。私がこれを知ったのは、原告側証人の報告集会でのことだ。話だけ聞いても何のこともだかよく理解できなかったが、後で『証拠調査』の

# 県内紙、軍命証言を報道

## 県外紙「隊長命なし」強調

敷村兵事主任だった富山真(旧姓新城)さんの証言

して捕虜になつてはならぬといふ「軍の手りゆう弾を自決用を含めて2個渡し、そのうち1個はだれかというのか」と富山さんは憤りを込めて語ると、決定的な証言記事を書かせていた。また、当の大城さん自身、自著が国側勝訴の判決文に引用されたことについて、沖縄タイムス、88年6月24日付文化欄、「それぞれ沖縄戦」3よみがえる亡霊(上)で、作家として

## 渡嘉敷島の集団自決

# 「軍からの命令あった」



## 「慰霊の日」前に新証言 島民に手投げ弾配る



## 授業に大

「軍からの命令あった」との証言を報じる1988年6月22日付琉球新報夕刊社会面の記事

「軍からの命令あった」との証言を報じる1988年6月22日付琉球新報夕刊社会面の記事

大問題 前述の渡嘉敷島での新聞記事は、次の座間味島との違いはあるが、本質的には同じ問題なので、以下の座間味島における日本(ヤマナル)の新聞のセンセーショナルなキャンペーン記事に対する反論にもなっている。 神戸新聞(85年7月30日)が「米軍初上陸の沖縄・座間味村集団自決/絶望の島民 悲劇の決断/村幹部が率先、1700人避難壕で日本軍の命令はなかった関係者の証言/信じていた一億総玉碎」という見出し記事。 同神戸新聞(86年6月6日)にも「米軍上陸...座間味村集団自決/部隊長の「玉碎命令」なかった」長かった戦後の苦悩/沖縄軍史「訂正へ」という大見出し記事の下、「自主的自決は早計 大城将保・沖縄史料編集所(現県立図書館資料編集室)主任専門員の話 宮城初枝さんから、何度か、話を聞いていたが、『隊長命令説』はなかったというのが真相のようだ。といつても軍隊には勤務隊や整備隊もあったわけだから、集団自決が即村役場幹部らがりーダーシップをとった自主的なものと決めつけるのは早計だ。